文芸プラザ

短編小説

占い師㊤

今井　隆

（一）

広瀬高子は、占い師である。広瀬高子が占い師という一風変った職業を選択したのは、それなりの事情がある。もう数年前のことになるが、高子がふと思ったことがその通りになるということが何回か続いた。柱時計の振り子が止まるような気がして見上げると、振幅が弱まってしばらくすると動かなくなり、あるいは絶対当選が間違いないといわれていた町長候補者に何かしら落選の予感がしていたら、接戦の末に涙を呑んだというようなたわいもないことが始まりだった。

しかし、そのうちに高子自身が怖くなるような問題についても、勘が当たるようになっていった。例えば、追い越していった車が事故にあうような気がしてしばらくいくと電柱に衝突していたこともあった。また、何かしら当たるような気がして外出のついでに買い求めた宝くじが三等になって百万円という大金が転がり込んできた。

高子の勘が当たることに対して夫の幸次郎は、最初、いったいどうしたんだと、いぶかるばかりであったが、次第に感情が不安定になっていった。高子から見ても、どこかおどおどしているという風に見えた。

高子が幸次郎の浮気をふと感じたのは、何時になく帰りが遅い夫が玄関の引き戸を遠慮がちにギィーと鳴らした時であった。真っ暗闇の中で目覚まし時計を見ると、短針は二時を指していた。高子は布団の中で、こんな予感だけは外れてほしいと思った。

幸次郎がそっとダブルベッドの上布団をめくった時、背を向けたまま『遅かったのね』と声をかけた。

夫が息を飲み込むのが分かった。

「……なんだ起きていたのか」

「……。遅くなるんだったら、電話ぐらいしてくれてもいいじゃない」

「それができなかったんだよ。会社の後輩がちょっと深刻な問題を起こしてね、慰めていたんだ」

高子は、それ以上問い質すことはしなかった。その頃には、このまま幸次郎と二人だけの暮らしを続けていいのだろうかという疑問が高子の胸に生まれ、だんだんと膨らみつつあった。

二人は長野県S大学の写真部で知り合った。高子が一年後輩に当たる。写真部の入部説明会で幸次郎に出会っているはずであるが、その時の幸次郎の印象を思い出そうとしても浮かんでこない。

高子が一回生の秋に、紅葉の写真を撮りに行くんだけど、と幸次郎から急に誘われた。てっきり写真部で行くものだと思って待ち合わせ場所まで出向くと、待っていたのは幸次郎一人だった。高子はその時、幸次郎と二人だけだと知っていたら、断ったかもしれないと思ったものだ。幸次郎はくりっとした目をいっそう丸めて、「今さ、桜が峰の紅葉がとてもいいんだ」と言った。

幸次郎が良いと言った紅葉は、現地に行ってみると少し早すぎる感じで、なんともしまりのない風景であった。ニッコウキスゲの群生地はすでに季節が終わっていたし、写真を撮るにしては間が抜けていたのだが、幸次郎はコースの下見をしていたらしく、とうもろこしの美味しい店だのヤギの乳で作ったソフトクリームを売っている店だのと実に詳しかった。自分に対する幸次郎の気持ちが嬉しかったが、一方で好みでもない男の行為がうっとうしくもあった。

その後は、幸次郎の一途な求愛に押された形で付き合いだしたのだった。

写真部のコンパの帰り道、気がついたときには幸次郎と二人で街を歩いていた。幸次郎が腕を組もうという仕草を見せ、高子は思わず幸次郎と腕を組んだ。幸次郎がどこで調べたのか、高子の生年月日や星座、血液型のことを詳しく知っていて、『俺たち相性が良いみたいだよ』などと言ったことを覚えている。

そして、きっと予備知識を入れたのだろう、高子の好きなバロック音楽の話題や、写真の構図に関する話をしたので高子は退屈せずにすんだが、少し飲みすぎたせいで気分が悪くなってきた。幸次郎は盛んにホテルで休んでいこうと高子の腕を引いた。いろいろな男と付き合ってきて、それなりに誘われた。誘われること自体は悪い気はしない。高子の手の内に、主導権があった。

その日、体調が悪かったことも手伝って激しい睡魔に襲われた。気が付いた時には、隣に幸次郎が寝ていたが、さすがに気が引けたものと見えて高子の着衣が少し乱れていた程度だった。

その件があってから、幸次郎のことを好きになった。何年になるのだろうと、ふと高子は考えた。二十歳の時だったから十五年も経ったことになる。幸次郎が大学を卒業して、親戚が経営する印刷会社に入り、その一年後に高子が卒業するのを待って二人は結婚した。

高子には酸いも甘いも分かっているはずだったが、子どものいない単調な生活が感情のたがを緩めていったのかも知れない、と高子は思う。もちろん、世の中には子どものいない夫婦は数え切れないくらいいるのだが、「子は鎹」という言葉どおり、子どものために離婚しない夫婦もそれなりに多いに違いない。

幸次郎と生活するうえで、収入面では心配がなかった。同族会社のその血族というだけあって、三十そこそこで営業部長の職を得ていた。ただ、付き合いが大変だといって夜遅くなることが多かった。高子が夜の暇つぶしで占いに凝るようになったのは、自然の成り行きといえなくもない。生まれ年月日と時間で運命を占い歴史の古い四柱推命、第一次世界大戦以降に生まれ二十二枚のカードで占うタロット、そして手相など占いは数え切れない程の種類があって、没頭するとそれぞれに奥が深かった。

S大学在学中に幸次郎が言った二人の相性は、ほとんどの占いが凶か大凶に出た。わずかにB型どうしである血液型占いだけが、相性が悪くはないという結果であった。幸次郎は、都合の良い占いだけを針小棒大に吹聴したに違いないと、今になって高子は思う。

幸次郎は、隣ですでに軽い鼾をかいていた。付き合いだから仕方がないと夜の街を遊び歩いている時、妻のことを少しでも思い浮かべたことがあるのだろうか。男というものは実に勝手なものだと思った時に、幸次郎がおならをした。生ごみの腐ったような臭いが漂った。高子は、無性に腹が立った。自分は夫にとって一体なんなのか。高子は、幸次郎を起こして問い糾したい気がした。

幸次郎の浮気相手は、会社の部下であった。会社中の噂になっていたというから、高子の耳に入らないはずがなかった。離婚するということは、結婚するよりも大変だということを聞いていたが、双方が離婚の意思を持っていたし子どももいなかったことから

高子の要求する条件をあっさりと幸次郎が飲んで、協議離婚をした。慰謝料は高額だったものの、それはいざというときの資金として手をつけたくなかった。所詮は夫のお金であって、自分の力で生計を立てたいという気持もあった。収入の道を探していた時、ふと占い師の仕事を思い立ったのだった。

占い師になるためには特別な試験はなく、極端にいえば誰でもすぐになれる。占いの学校に入って学ぶか、あるいは占い師のところに弟子入りするなどの方法があるが、もちろん独学で学んでも良い。最近は不況のせいで占い師になりたい者が多く、そのための学校も結構流行っているという話を聞いた。高子は、それまでに占いに関するかなりの本を読んでいて、遊び半分で友人に占いをしたことがあったが、とてもよく当たったので占い師で生計を立てる自信がないわけではなかった。県都にある「占い館」という占い専門のビルに電話をすると、とりあえず面接に応じてくれることになった。

一週間ほどしてから面接らしきものを受けたが、すでに採用の占い師が決まっているような感じで面接の担当者はおざなりな対応に終始した。ただ、遠方から出かけていった配慮からか、あるいは高子に資質を感じなかったからかは分からないが、「すでにご存知のことだとは思いますが……」と前置きしてから、占いの業界では占い師として飯を食べている人は少なくむしろ副業として占い師をしている人が多いことや、お客とのコミュニケーションの中で相手の置かれている状況をつかみ適切なアドバイスをすることが大切なのだと、占い師の心得のようなものを話しだした。二、三日してから案の定、採用できないという電話があった。最後に、「ただ、どうしても占い師になりたいのなら一度ホテルの従業員になってから、ホテルの片隅で占いの看板を出している人もいますよ」と付け加えた。高子の住んでいる町の近くに、全国的に有名な温泉街があることを意識しての助言だと、高子は受け止めた。

（二）

G市中央公園のベンチに深々と腰掛けて、北小路孝之は繁った桜の大木をぼんやりと見上げていた。十歳近くふけて見えるが、まだ三十五歳である。一ヶ月以上も風呂に入っておらず、髭はだらしなく伸びていた。ホームレス支援のボランティアが夕食だけは準備してくれるので、何とか命をながらえている。五ヶ月のホームレス生活の間に、体力の消耗を避けるために体をできるだけ動かさないようにするという知恵もついた。

北小路孝之は、県北のY町で一年ほど前まで小さな家電店を開いていた。近くのK市に相次いで大手の家電量販店ができてからは青息吐息の経営が続いていたが、それでも馴染みの客は有り難いもので家電製品もそれなりに売れていたし、家庭内配線工事などの依頼もあって何とか店を維持していた。ところが、セールスに出ると言っては外出していた孝之の妻が、実のところはパチンコにはまっていて、おかしいと気付いた時にはサラ金から二百万円ほどの借金をしていることが判明した。運転資金の三十万円、四十万円というお金にも苦しいことさえあったので、さすがに孝之は閉口した。資金繰りで頭がいっぱいの時に運悪く三百万円の不渡り手形をつかまされた。少し危険は感じたものの、呉服店の老舗だったし親しくしていたこともあって手形にしたのだが、それが間違いだった。手形の落ちる二日前に、呉服店が自己破産したのである。当てにしていた金であった。民事再生法による破産も考えたが、弁護士に相談すると弁護士費用が百万円ほどかかるといわれて、孝之にはその費用が出せなかった。妻とは書類の上で離婚して、二人の子どもと一緒に妻の実家で生活の面倒を見てもらうことにした。自らは夜逃げするしかなかった。

しばらくは連絡を取らないということにしてホームレスになったのは、今年の二月初めである。いくら太平洋側に面している地域とはいえ、冬の寒さは厳しかった。肌を刺す寒さという言葉を孝之は知ってはいたが、寒いというよりは痛いという言葉の方が正確な表現であろう。孝之は、これから毎日少しずつ暖かくなるのだと自分に言い聞かせて、他の仲間とともに命をつないできた。妻や子どものことを考えなくはなかったが、時々ありつく日雇いの仕事は体力を消耗したし、第一、現場監督に賞味期限切れの弁当を渡される時の蔑んだ目に射られるのが辛かった。ホームレス社会にも一般社会の縮図があって、おとなしく従順な者や少しのことで腹を立てる荒くれがいた。ただ、正直どちらかと言うと気の弱い者が多い。最近は、一流企業に働いていたらしい、背広を着せたらよく似合うという風の男が増えていた。

まもなく梅雨が明けようとする晴れた日の夕方に、孝之は古雑誌の物色に出かけた。

運が良いと、ゴミ箱の中に放り投げられている週刊誌にめぐり合うことがあった。そうすれば、石油ランプの下でしばらく気を紛らわせることができるのである。

ゴミ箱の中を覗き込んだとき、孝之は人が苦しんでいるようなうめき声を聞いたような気がした。空耳だろうかと思いながら公園のベンチを見ると、人がうずくまっていた。孝之はすばやく近づいた。胸を手で抑え額には脂汗をかいている。七十代になっていると思われるような老紳士であった。周りを見回したがあいにくと人がいない。孝之はとっさの判断で、路上に飛び出して体を張って一台の車を止めた。老人の運が良かったのであろう、その車が救急病院に患者を運んだ後に、消防署まで帰ろうとしていた救急車であった。孝之が事情を話すと救急隊員はすぐに老人を救急車の中に運び入れた。孝之も救急車に乗り込んだ。

孝之は救急車の中で、一人の老人の生死と向かい合っていた。すでに心臓が止まっているらしく、救急隊員は必死の心臓マッサージを繰り返していた。心臓が止まって三分過ぎると、心臓マッサージで蘇生する可能性は五十パーセントになるので秒単位の勝負である。

救急隊員の息遣い、街の雑踏、澄んだサイレンの音、病院と応対する声……。孝之は、ふと天秤ばかりを想像した。一人の人間の生と死が、天秤が釣り合った状態に置かれている。その支点を生の方に動かしたのは、少し前は自分であったし、現在は救急隊員である。そして運良く心臓が蘇生すれば、これからは医師に委ねられる。

苦しみの表情が消えた老人の顔をじっと見つめていたとき、ふと、自分はどんな死に方をするのだろうと思った。このままの生活を何時までも続けていくというつもりは、孝之にはない。それはホームレス全体についても言えることだと、孝之は確信している。誰だって暖かい布団で眠りたいし、おいしい物を食べたいに決まっている。ホームレスになる切っ掛けはそれぞれ違っている。失業、夜逃げ、人間関係の軋轢、失恋の痛手など事情はあるが、いずれにしても社会の矛盾の掃き溜めだと孝之は思う。そして同じ仲間が、公式統計だけで日本に二万五千人も生きている。

孝之の場合はもちろん経済的な問題に起因している。お金が無いからホームレスになった人間に、お金を求めるのは無理というものである。しかし、お金が無ければホームレスの生活から抜け出ることはできない。孝之は悶え苦しんでいた。そして、お金の有難さをしみじみと感じた。

たまたまありつける日雇いの日当は数千円程度だし、空き缶拾いを一日中やったとしても三百円程度にしかならない現状からすると、このままの生活を続けるしかないのだろうか。そして、仲間たちがそうであるように病気になっても病院にも行けずに死ぬんだろうか。そんなことを逡巡しながら孝之は老人から目を離し、穏やかな車窓の景色をぼんやりと眺めた。その時、「蘇生したぞ」という救急隊員の鋭い声を聞いたのだった。

（あすに続く）

いまい・たかし　昭和30年、岐阜県益田郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、詩、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「麦夢」主宰。短編で、「岐阜市文芸祭賞」受賞。平成12年に水稲新品種「龍の瞳」を発見して育成。19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（資）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。

文芸プラザ